

21. その他

文献

Yasui T, Yamada M, Uemura H, et al. Changes in circulating cytokine levels in midlife women with psychological symptoms with selective serotonin reuptake inhibitor and Japanese traditional medicine. *Maturitas* 2009; 62: 146-52.

1. 目的

更年期障害における不安、鬱症状の加味逍遙散とパロキサチンによる改善効果比較

2. 研究デザイン

ランダム化比較試験 (RCT)

3. セッティング

徳島大学病院産婦人科

4. 参加者

2005年11月から2007年10月までの間に徳島大学病院産婦人科外来を受診した、更年期障害の症状としての不安、中等度の鬱の患者76名。大鬱の患者は除外した。

5. 介入

Arm 1: パロキサチン群 (グラクソ・パロキサチン 10mg/日 6ヶ月) 38名

Arm 2: 加味逍遙散群 (ツムラ加味逍遙散エキス顆粒 7.5g/日 6ヶ月) 38名

6. 主なアウトカム評価項目

血中サイトカイン IL-1 β , IL-2, IL-4, IL-5, IL-6, IL-7, IL-8, IL-10, TNF- α , IFN- γ , MCP-1, MIP-1 β と Greene Climacteric Scale にて評価を行った。

7. 主な結果

パロキサチンおよび加味逍遙散の両群において Greene Climacteric Scale 上、精神的、身体的、血管運動性症状が改善したが、その改善率はパロキサチンの方が大きかった。血中 IL-6 の濃度は内服前後の比較において両群とも有意に減少しており、Greene Climacteric Scale とともに正に相関していた。その他 IL-8, MIP-1 β , MCP-1 も有意に減少していた。

8. 結論

IL-6 は、パロキサチンおよび加味逍遙散に共通の薬効発現機序と関連している可能性があり、治療の指標として有用となり得る。加味逍遙散は更年期症状の改善に役立つが、その作用はパロキサチンより弱い。

9. 漢方的考察

なし

10. 論文中の安全性評価

パロキサチン群において38名中6名が頭痛、吐き気、消化器症状を訴えて脱落したが、加味逍遙散群においては、1名が味の苦味が強いのと下痢を起こすと言う事で、2名は効果がないという事で脱落した。

11. Abstractor のコメント

加味逍遙散は桂枝茯苓丸と並んで更年期障害の治療に頻用される処方である。パロキサチンよりやや劣るが、有用であることが示された事は重要である。実際の治療現場では、漢方的所見に合わせて運用されており、漢方的な所見を反映して治療するとより有効性が示される可能性もある。しかしながら、身体、精神症状の改善が血中 IL-6 の濃度が相関していることが示された事は興味深く、今後、加味逍遙散の作用機序解明に繋がって行く事を期待したい。

12. Abstractor and date

中田英之 2010.6.1